

# 三角形要素を用いた有限要素法による平面弾性問題解析

2026.01

## 1. プログラムの概要

- 1) 本プログラム plane2ds.exe は、三角形要素を用いた有限要素法（FEM）により平面弾性問題（平面応力または平面ひずみ）を解析するものである。ソルバーとしてスカイライン法とコレスキー法<sup>1)</sup>を用い、開発言語として Visual Basic(VS2026)を用いている。なお、動作 OS は Windows11 である。
- 2) 節点応力については、関係する要素の応力（要素応力は一定値<sup>2),3)</sup>）を要素面積の大きさに応じて節点に振り分け、要素面積の重みつき平均を求めて計算している。
- 3) ユーザーはワードパッドなどのテキストエディターを用いるか、メッシュ生成プログラム grid3v4.exe を用いて（こちらを推奨する）、後に示す入力データを作成し、本プログラムはそのデータをファイルから読み込んで FEM を実行する。
- 4) 本プログラムは、最大 30000 節点まで解析可能であり、数千節点の規模の問題であっても数秒で解を得ることができる。また、材料数は 10 個を上限としている。
- 5) 解析結果は、テキストファイルで出力されるとともに、画面には解析対象の変位の様子や色づけされた応力が表示される。
- 6) 画面に表示された変形図や応力図は、マウスの操作によって、Google Map のように自由に移動、拡大縮小が可能である。これにより、細部における変位や応力を調べることができる。
- 7) マウスを節点の近くに移動すると、その節点の変位や応力の値が自動的にポップアップ表示（マウスホバーという）される。

## 2. ユーザーが準備すべきデータ

以下に、FEM 解析に必要なデータの内容を示す。ただし、これらのデータは、すべてメッシュ生成プログラム（grid3v4.exe）によって作成されるので、参考にする程度に読めばよい。

- 1) 例 1（たとえば、ファイル名を beam500100.dat とする）

図 1 のようなはりの曲げ問題の例を挙げてその準備手順を示す。（赤い破線は変形後の様子を示している）

はりの寸法は、長さ  $l=500\text{mm}$ 、高さ  $h=100\text{mm}$ 、厚さ  $t=5\text{mm}$  とし、左端を固定端、右端に垂直下方に荷重が作用するものとする。材料は、軟鋼を仮定し、縦弾性係数を  $E=206 \times 10^9 \text{N/m}^2=206 \times 10^3 \text{N/mm}^2$ 、ポアソン比を  $\nu=0.3$  とする。

はじめに、はりの左端下側を原点とする  $xy$  座標を設定する。次に、長さ  $500\text{mm} \times$  高さ  $100\text{mm}$  の寸法のはりの領域を小さな 4 角形要素に分割する。図 1 は、 $y$  方向に 5 分割、 $x$  方向に 20 分割した場合を示している。有限要素法ではこの分割数が細かいほど高精度な解が得られるが、ここでは、説明の便宜のために粗い分割をしている。

分割によって得られる三角形は 3 つの頂点を有するが、これらを節点（node）といい、この節点に 1 からはじまる番号付けをする。図 1 の場合には、右端の下側を節点 1 とし、合計 126 個の節点に番号付

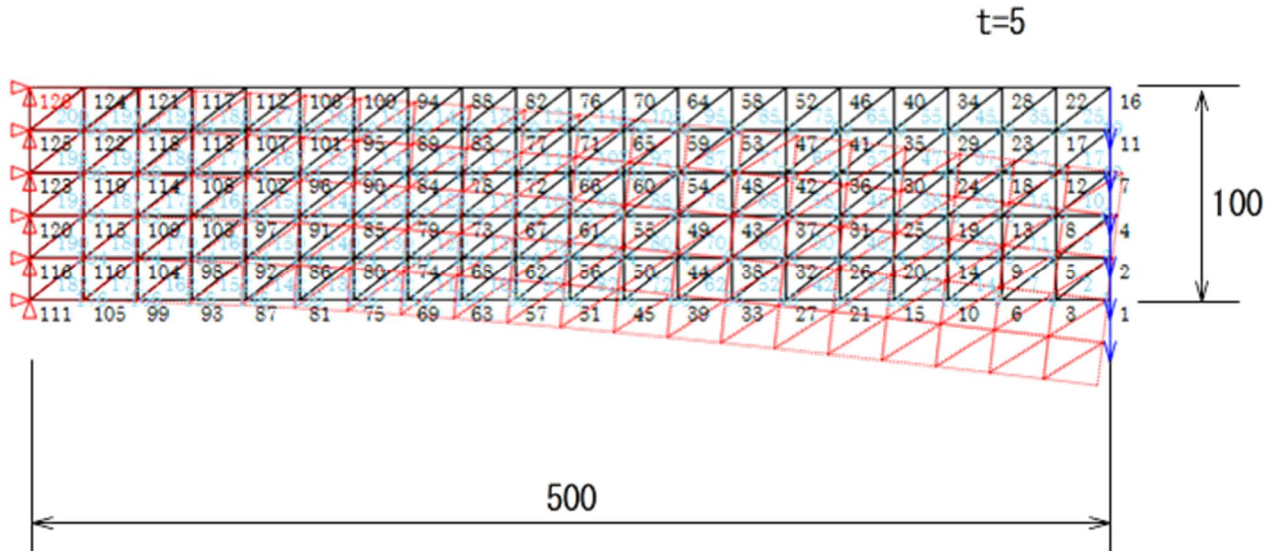


図 1 はりの曲げ(例 1)

けをしている。このとき、なるべく 1 つの三角形が有する 3 頂点の番号差が小さくなるように番号付けすると何かと都合が良い。

さらに、それぞれの 4 角形に対して、**要素** (element) 番号を付する。節点番号同様、1 から始めて、図 1 では 200 個の三角形要素に番号をつけている。有限要素法では、節点番号と区別するために要素番号を①のように○囲み数字で表す習慣がある。これより、各節点の  $x, y$  座標は、節点番号順に並べると

1 , 5e+02, 0e+00	115 , 2.5e+01, 4e+01
2 , 5e+02, 2e+01	116 , 0e+00, 2e+01
3 , 4.75e+02, 0e+00	117 , 7.5e+01, 1e+02
4 , 5e+02, 4e+01	118 , 5e+01, 8e+01
5 , 4.75e+02, 2e+01	119 , 2.5e+01, 6e+01
6 , 4.5e+02, 0e+00	120 , 0e+00, 4e+01
7 , 5e+02, 6e+01	121 , 5e+01, 1e+02
8 , 4.75e+02, 4e+01	122 , 2.5e+01, 8e+01
9 , 4.5e+02, 2e+01	123 , 0e+00, 6e+01
10 , 4.25e+02, 0e+00	124 , 2.5e+01, 1e+02
====途中省略=====	125 , 0e+00, 8e+01
114 , 5e+01, 6e+01	126 , 0e+00, 1e+02

となる。このとき、データを区切るためにデータの間にはコンマを入れる。また、節点番号は整数、 $x, y$  座標は実数（小数点付きの数値）で記述し、数字、コンマおよび空白などはすべて半角とする。

つぎに、**要素** (element) **データ**を作成する。図 1 では全要素数は 200 個なので、各要素に番号を 1 から 200 まで割り当て（番号のつけ方は任意だが、規則性を与えて番号付けをするとよい）、その要素を反時計回りに囲む 3 個の節点番号をメモする。また、各要素の縦弾性係数  $E$ （節点座標にミリメートル mm の単位を用いたのであれば、縦弾性係数は  $N/mm^2$  で与える）と材料番号（ここでは、はり全体

が同一材料なので材料番号は1とする．たとえばはりが2個の材料から成り立つ場合には，要素に応じて材料番号を1もしくは2とする）を設定する．図1の要素番号1の要素は，要素を囲む節点番号は，3, 1, 2であり，材料番号は1である．これより，要素データは

1 , 3 , 1 , 2 , 1	190 , 116 , 115 , 120 , 1
2 , 3 , 2 , 5 , 1	191 , 120 , 115 , 119 , 1
3 , 5 , 2 , 4 , 1	192 , 118 , 117 , 121 , 1
4 , 6 , 3 , 5 , 1	193 , 119 , 118 , 122 , 1
5 , 5 , 4 , 8 , 1	194 , 122 , 118 , 121 , 1
6 , 8 , 4 , 7 , 1	195 , 120 , 119 , 123 , 1
7 , 6 , 5 , 9 , 1	196 , 123 , 119 , 122 , 1
8 , 9 , 5 , 8 , 1	197 , 122 , 121 , 124 , 1
9 , 10 , 6 , 9 , 1	198 , 123 , 122 , 125 , 1
10 , 8 , 7 , 12 , 11 , 5 ,	199 , 125 , 122 , 124 , 1
====途中省略====	200 , 125 , 124 , 126 , 1

と表される．

次に，**拘束**（constraint）データを考える．節点に拘束を与えない場合，はりには剛体変位や剛体回転が生じ，問題そのものが解析できない．本問題では，左端の節点111, 116, 120, 123, 125, 126を完全固定（ $x, y$ 方向への移動を0.0に拘束）する．問題によっては，考えている問題の剛体変位や剛体回転を防ぐために，変形の対称性などから変位の拘束状態を付与することが必要な場合があることに留意する．節点の $x, y$ 方向別の拘束ありを1，拘束なしを0で表し，すべての拘束節点を

111, 1, 0.0, 1, 0.0  
116, 1, 0.0, 1, 0.0  
120, 1, 0.0, 1, 0.0  
123, 1, 0.0, 1, 0.0  
125, 1, 0.0, 1, 0.0  
126, 1, 0.0, 1, 0.0

と表すことができる．拘束の有無を表す0および1は整数，拘束量は実数とする．

最後は**荷重**（load）データについて述べる．図1に示すように，右端の各節点1, 2, 4, 7, 11, 16の $y$ 軸の負の方向に500Nが作用するものとする．ヤング率を与えた際の力の単位はニュートン [N] であったから，荷重の単位もニュートン [N] で与える必要がある．この荷重データを

1, 0, -500.0  
2, 0, -500.0  
4, 0, -500.0  
7, 0, -500.0  
11, 0, -500.0  
16, 0, -500.0

と与える。荷重節点番号は整数で、荷重値は実数とする。

なお、以上の問題では、総節点数が 126、材料数が 1、総要素数が 200、拘束節点数が 6、荷重節点数が 6 であり、これらを**基本データ** (basic data) と名付ける。

以上の説明に基づいて、図 1 の問題に関して、ユーザーが用意すべきデータは、最初の行に基本データを与えて

```
126 , 1 , 200 , 6 , 6
1 , 5e+02 , 0e+00
2 , 5e+02 , 2e+01
3 , 4.75e+02 , 0e+00
4 , 5e+02 , 4e+01
5 , 4.75e+02 , 2e+01
6 , 4.5e+02 , 0e+00
7 , 5e+02 , 6e+01
8 , 4.75e+02 , 4e+01
9 , 4.5e+02 , 2e+01
10 , 4.25e+02 , 0e+00
. . . . .
=====途中省略=====
. . . . .
119 , 2.5e+01 , 6e+01
120 , 0e+00 , 4e+01
121 , 5e+01 , 1e+02
122 , 2.5e+01 , 8e+01
123 , 0e+00 , 6e+01
124 , 2.5e+01 , 1e+02
125 , 0e+00 , 8e+01
126 , 0e+00 , 1e+02
1, 206000, 0.3, 5.0
1 , 3 , 1 , 2 , 1
2 , 3 , 2 , 5 , 1
3 , 5 , 2 , 4 , 1
4 , 6 , 3 , 5 , 1
5 , 5 , 4 , 8 , 1
. . . . .
=====途中省略=====
. . . . .
195 , 120 , 119 , 123 , 1
```

```

196 , 123 , 119 , 122 , 1
197 , 122 , 121 , 124 , 1
198 , 123 , 122 , 125 , 1
199 , 125 , 122 , 124 , 1
200 , 125 , 124 , 126 , 1
111, 1, 0, 1, 0
116, 1, 0, 1, 0
120, 1, 0, 1, 0
123, 1, 0, 1, 0
125, 1, 0, 1, 0
126, 1, 0, 1, 0
1, 0, -500
2, 0, -500
4, 0, -500
7, 0, -500
11, 0, -500
16, 0, -500
2D FEM analysis by plane2ds

```

である。最後の行の 2D FEM analysis by plane2ds は、問題へのコメントであり、任意のメモを書き添えるようにしている。

以上をまとめると、解析に必要な入力データは以下のようにになっている。

#### 入力データの構成（（ ）内の記号はプログラムで用いている変数名）

1. 基本データ（1 行）  
総節点数 (np), 材料数 (nm), 総要素数(ne), 拘束節点数(nb), 荷重節点数(nf)
2. 節点データ (np 行)  
節点番号 (1 から),  $x$  座標,  $y$  座標
3. 要素データ (ne 行)  
要素番号 (1 から), 要素を反時計に囲む 3 個の節点番号, 材料番号
4. 材料データ (nm 行)  
材料番号 (1 から), 縦弾性係数, ポアソン比, 板厚（平面応力の場合は実際の厚さ, 平面ひずみ  
の場合はゼロを与える。）
5. 拘束データ (nb 行)  
拘束節点番号,  $x$  方向の拘束の有無 (0(拘束なし)か 1 (拘束あり)),  $y$  方向の拘束の有無 (0 か  
1)
6. 荷重データ (nf 行)

荷重節点番号,  $x$  方向荷重,  $y$  方向荷重

#### 7. コメント (1 行)

2D FEM analysis by plane2ds

### 4. FEM の実行手順

3. で準備したデータ (beam500100.dat) をもとに, 平面弾性問題の有限要素解析の手順を以下に述べる.

本プログラム plane2ds.exe を起動すると, 中央が描画領域である, 図 2 のような起動画面が表示される.

ここで, ツールメニューの左側の「ファイル」→「読み込み」をクリックすると, ファイル選択のダイアログボックスが表示されるので, 3. のデータ beam500100.dat を選択する.



図 2 起動画面

図 3 は, そのファイルを選択後の画面である.

画面には, 与えられた節点データ, 要素データに基づいて要素分割形状が描かれ, 拘束節点や荷重節

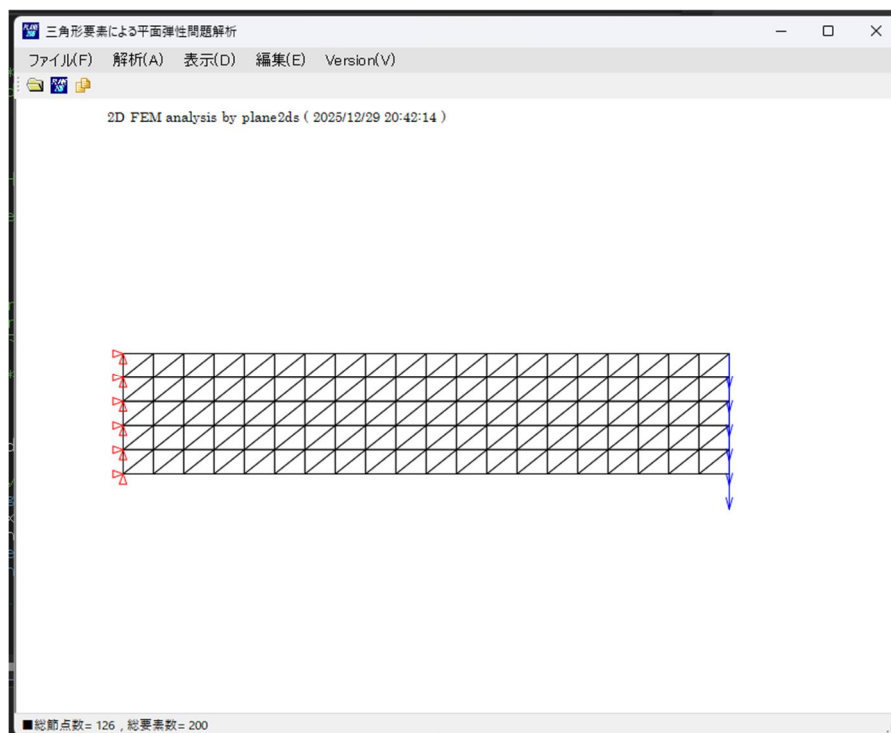


図 3 データファイル読み込み後の画面

点に対してもそれに応じた記号が描かれる。

次に、ツールメニューの「解析」→「実行」とメニューを選択すれば、有限要素解析が実行される。本問題は 126 節点の小規模な問題なので瞬時に解析が終了する。なお、数千節点の規模の問題であっても数秒で解析が終了する。

解析が終わったあとに、ツールメニューの「表示」→「変位」

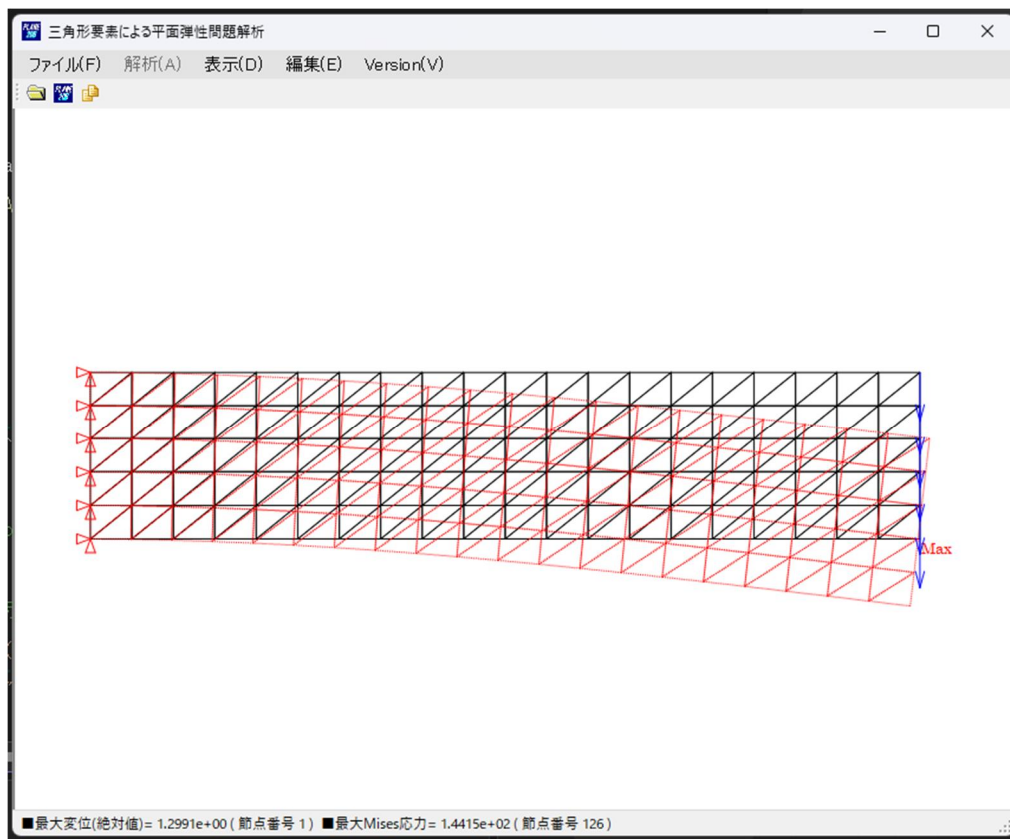


図 4 変形図の表示

とすると、図 4 のような変形図が表示される。そこでは、はりの変形後の様子が赤い破線で示され、最大変位の生じる節点近傍に「Max」という文字が表示される。わかりやすさのために、変位の大きさは実際の変位をすこし大きめに拡大して（最大変位の大きさが画面の大きさの 10%としている）表示している。

次に、ツールメニュー「表示」→「応力」とたどれば、3つの応力成分  $\sigma_x$ ,  $\sigma_y$ ,  $\tau_{xy}$  および Mises 応力（等価応力）のカラーマップ（コンター図ともいう）を得ることができる。図 5 は、「表示」→「応力」→「Sigma-x」とたどったときの Mises 応力のカラーマップの図である。さらに、マウスを節点近くに移動させると（マウスホバー（mouse hover）という）、その節点の応力（と同時に変位成分も）の大きさが、 $x, y$  成分ごとにポップアップ表示される。図 5 には、節点 126（固定端の最上部）の近くにマウスを近づけたときの変位や応力の値がポップアップされる様子が示されている。この場合、

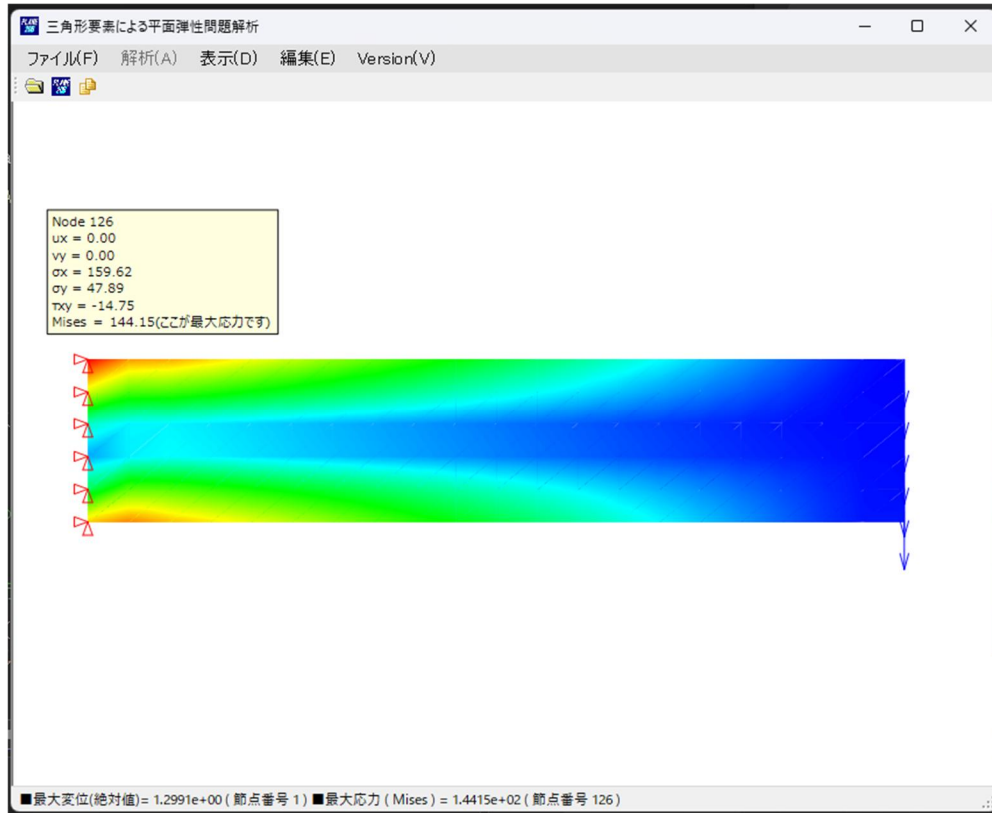


図 5 応力のコンターマップとマウスホバー

その大きさが  $\sigma_x \doteq 159 \text{ N/mm}^2$  と読み取れる。ただし、この固定端の角部における応力は、特異点（線形弾性学にもとづいて解析すると、無限大の応力値を示す箇所）なので、この値  $159 \text{ N/mm}^2$  という値は、平均化された応力として計算されていることに注意しなければならない。

図 5 では、応力の最小値から最大値までを 10 等分した色づけによって要素の応力が表示され、画面の右には、色の対応した凡例が示される。

材料力学によれば、幅  $b$ （図 1 では、厚さ  $t$  に相当）、高さ  $h$  の断面を有する片持ちはりの固定端の応力  $\sigma$  は、 $P$  をはり先端に作用する荷重として

$$\sigma = \frac{M}{bh^2/6} = \frac{6Pl}{bh^2} \quad (1)$$

と表される<sup>4)</sup>。本問題では、 $P=1000 \times 3=3000 \text{ N}$ 、 $l=500 \text{ mm}$ 、 $b (=t)=5 \text{ mm}$ 、 $h=100 \text{ mm}$  であるから

$$\sigma = \frac{6 \times 3000 \times 500}{5 \times 100^2} = 180 \text{ N/mm}^2 \quad (2)$$

と得られる。FEM の結果 ( $159 \text{ N/mm}^2$ ) は式(2)より約 12% 小さい。

はりの先端のたわみ  $\delta$  は、はり理論によれば

$$\delta = \frac{Pl^3}{3EI} = \frac{Pl^3}{3E(bh^3/12)} = \frac{4Pl^3}{Ebh^3} \quad (3)$$

である。本問題の数値を代入すると

$$\delta = \frac{4Pl^3}{Ebh^3} = \frac{4 \times 3000 \times 500^3}{206 \times 10^3 \times 5 \times 100^3} = 1.456 \text{ mm} \quad (4)$$



と得られる。FEM の結果は、はりの先端の最下部にマウスホバーすると  $\delta = u_y = 1.29 \text{ mm}$  であることがわかるので、この結果は式 (4) より約 11% 小さい。ここで、本プログラムで使用している三角形一次要素（一定ひずみ要素）の特性上、要素内のひずみ分布が一定に制限される。このため、粗いメッシュでは変位の近似精度が低下し、剛性を過大に評価する傾向がある（一種のロッキング現象に似た挙動）

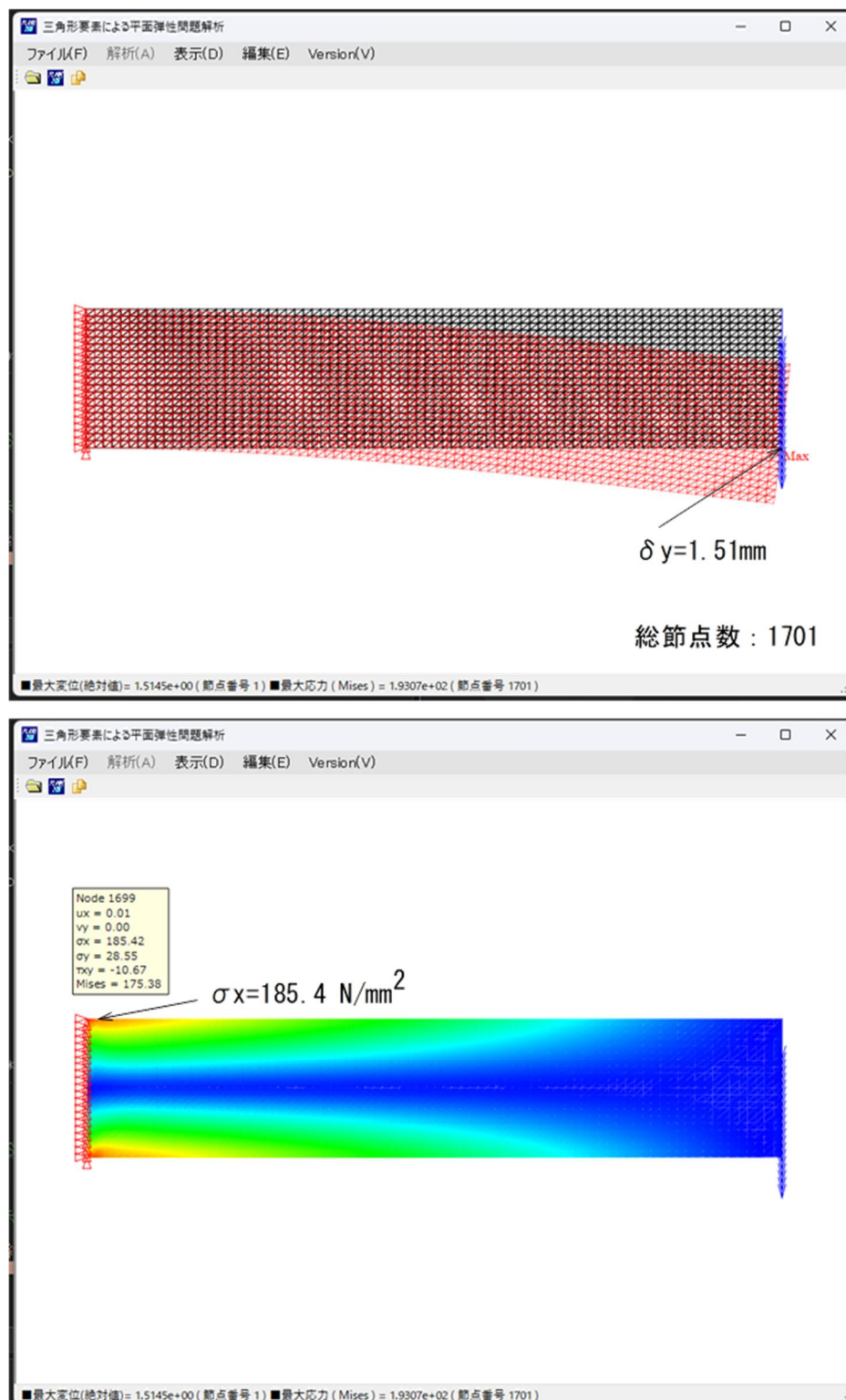


図 6 細分割したときのはりの曲げ

ため、正しい解を得るためには、十分な要素分割が必要である。また、有限要素法は、変位関数を仮定してから理論展開しているため、変位の微分によって得られる応力は変位よりも精度が低い。

参考までに、より細かな要素分割（561 節点，500 要素，beam500100-fine.dat）による結果を図 6 に示す。

本問題のように、はりの長さ  $l$  に対する高さ  $h$  の比  $h/l$  が大きい場合には、せん断力によるたわみも考慮する必要がある。せん断力の影響を考慮したはり先端のたわみは

$$\delta = \frac{Pl^3}{3EI} \left( 1 + 0.975 \frac{h^2}{l^2} \right) = \frac{4Pl^3}{Ebh^3} \left( 1 + 0.975 \frac{h^2}{l^2} \right) = 1.512 \text{ mm} \quad (5)$$

である<sup>4)</sup>から、このたわみは、FEM によって得られた図 6 の先端変位  $\delta = 1.51 \text{ mm}$  とよい一致を示している。また、固定端上部のやや右側（特異点を避けた節点）の  $x$  方向応力  $\sigma_x$  は、 $185.4 \text{ N/mm}^2$  と得られ、式 (2) のはり理論から得られる曲げ応力  $180 \text{ N/mm}^2$  とよく一致している。

本プログラムでは、マウスホイールの回転で図形の拡大縮小、マウスの左ボタンのドラッグで移動が自由に行えるようになっている。解析対象を拡大表示して応力を表示すれば、応力を仔細に把握できる。図 7 は、解析対象の固定端付近を拡大表示して、応力値などをポップアップ表示した例である。

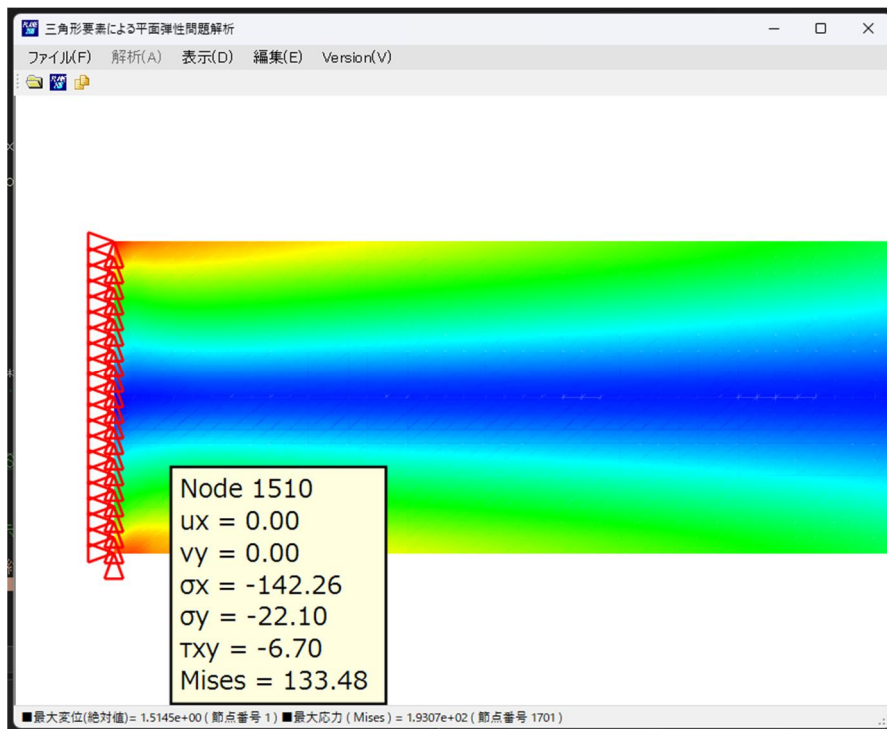


図 7 拡大表示の例

## 5. 解析結果のテキスト出力

本プログラムでは、実行ファイル plane2ds.exe の置かれたフォルダーに、Plane2dsResults.txt というファイル名で解析結果が書き込まれる。

本例のそのファイルの内容は以下のものである。

```
*****
*          有限要素法による平面弾性問題解析          *
*          ==  三角形一定ひずみ要素  ==              *
*          ( Skyline Method, VB2026 )                *
*          Ver.1.03 (2025)                            *
*                                                    *
*          == DATE & TIME 2025/12/31 9:48:13 ==      *
* Copyright(C) 2025- All Rights Reserved by T. HORIBE *
*          tadashihoribe@gmail.com                  *
*****
```

File name ==> C:\Users\user\Dropbox\vb2026\vfem\plane2ds\beam500100.dat

総節点数 = 126  
総材料数 = 1  
総要素数 = 200  
拘束節点数 = 6  
荷重節点数 = 6

```
===== 節 点 デ ー タ =====
節点番号  x-座標  y-座標  節点番号  x-座標  y-座標
1          500      0          2          500      20
3          475      0          4          500      40
5          475      20         6          450      0
7          500      60         8          475      40
9          450      20        10         425      0
. . . . .
=====途中省略=====
. . . . .
113        75        80        114        50        60
115        25        40        116         0        20
117        75       100        118        50       80
119        25        60        120         0       40
121        50       100        122        25       80
123         0        60        124        25      100
125         0        80        126         0      100
```

===== 材 料 デ ー タ =====

材料番号	ヤング率	ポアソン比	板 厚
1	206000	0.3	5

===== 要 素 デ ー タ =====

要素番号	I	J	K	材料番号
1	3	1	2	1
2	3	2	5	1
3	5	2	4	1
4	6	3	5	1
5	5	4	8	1
6	8	4	7	1
7	6	5	9	1
8	9	5	8	1
9	10	6	9	1
10	8	7	12	1

.....

=====途中省略=====

.....

196	123	119	122	1
197	122	121	124	1
198	123	122	125	1
199	125	122	124	1
200	125	124	126	1

===== 拘 束 条 件 =====

拘束節点番号	IX	X-変位拘束値	IY	Y-変位拘束値
111	1	0	1	0
116	1	0	1	0
120	1	0	1	0
123	1	0	1	0
125	1	0	1	0
126	1	0	1	0

===== 荷 重 条 件 =====

節点番号	x 方向荷重	y 方向荷重
1	0	-500
2	0	-500
4	0	-500
7	0	-500
11	0	-500
16	0	-500

===== 変 位 =====

節点	u	v	節点	u	v
1	-1.8801e-01	-1.2854e+00	2	-1.1223e-01	-1.2848e+00
3	-1.8726e-01	-1.1895e+00	4	-3.7534e-02	-1.2844e+00
5	-1.1187e-01	-1.1893e+00	6	-1.8578e-01	-1.0947e+00
7	3.6787e-02	-1.2843e+00	8	-3.7450e-02	-1.1891e+00
9	-1.1104e-01	-1.0943e+00	10	-1.8342e-01	-1.0008e+00

.....

===== 途中省略 =====

.....

117	5.1521e-02	-4.8182e-02	118	2.0475e-02	-2.1545e-02
119	3.4142e-03	-5.0474e-03	120	0.0000e+00	0.0000e+00
121	3.5034e-02	-2.4684e-02	122	1.0138e-02	-6.3703e-03
123	0.0000e+00	0.0000e+00	124	1.7628e-02	-9.3068e-03
125	0.0000e+00	0.0000e+00	126	0.0000e+00	0.0000e+00

===== 節 点 応 力 =====

	x 方向	y 方向	せん断	等価
要素番号	$\sigma_x$	$\sigma_y$	$\tau_{xy}$	$\sigma_e$
1	-4.6704e+0	5.0088e+0	-1.8684e+0	8.9870e+0
2	-2.2925e+0	2.2256e+0	-2.1029e+0	5.3458e+0

3	-1.7373e+0	4.0781e+0	-3.4808e+0	7.9425e+0
4	-1.2361e+1	-7.9492e-1	-9.7353e-1	1.2101e+1
5	-1.5796e-1	1.7754e+0	-3.5994e+0	6.5057e+0
.....				
=====途中省略=====				
.....				
194	8.2950e+1	-7.4453e+0	4.7916e+0	8.7307e+1
195	3.0915e+1	9.2746e+0	-7.9983e+0	3.0773e+1
196	2.6424e+1	-5.6981e+0	5.3191e+0	3.1082e+1
197	1.4764e+2	1.4047e+1	-9.5308e+0	1.4211e+2
198	9.1795e+1	2.7538e+1	-1.0094e+1	8.3441e+1
199	8.1823e+1	-5.6996e+0	4.7417e+0	8.5214e+1
200	1.5962e+2	4.7885e+1	-1.4748e+1	1.4415e+2
.....				
*****				
2D FEM analysis by plane2ds 2025/12/31 9:48:13				
*****				

出力内容の荷重条件までは、入力データ内容の出力であり、それ以降は、FEM 解析によって得られたすべての節点変位や要素応力の出力である。また、応力の出力結果の最後の方には、最大等価応力の値なども出力されている。（等価応力とは、Mises 応力を指す）

出力結果のなかで、たとえば

===== 変 位 =====					
節点	u	v	節点	u	v
1	-1.8801e-01	-1.2854e+00	2	-1.1223e-01	-1.2848e+00
.....					

と出力されている部分については、節点 1,2 の x,y 方向の変位の大きさを表しており、入力時での長さの単位は【mm】であったので、これらの変位の単位は【mm】である。

同様に、要素番号ごとの応力の出力

	x 方向	y 方向	せん断	等価
要素番号	$\sigma_x$	$\sigma_y$	$\tau_{xy}$	$\sigma_e$
1	-4.6704e+0	5.0088e+0	-1.8684e+0	8.9870e+0
.....				

については、長さの単位に mm，力の単位に N を入力しているので，応力の単位は  $\text{N/mm}^2$  となっていることに留意する．すなわち，節点 1 に生じている応力は，例えば  $\sigma_x = -4.47 \text{ N/mm}^2 \doteq -4.5 \times 10^3 \text{ MPa}$  と読み取ればよい．

出力されるファイル Plane2dsResults.txt は，FEM 解析の実行の度に同名で書き込まれる．したがって，このファイルを保存したい場合には，別名でコピーしておくといよい．

## 7. ほかの解析例

本プログラムによる解析例を以下に示す．

【例 1】板の引張り (3000N の引張荷重，beam500100-tension.dat)

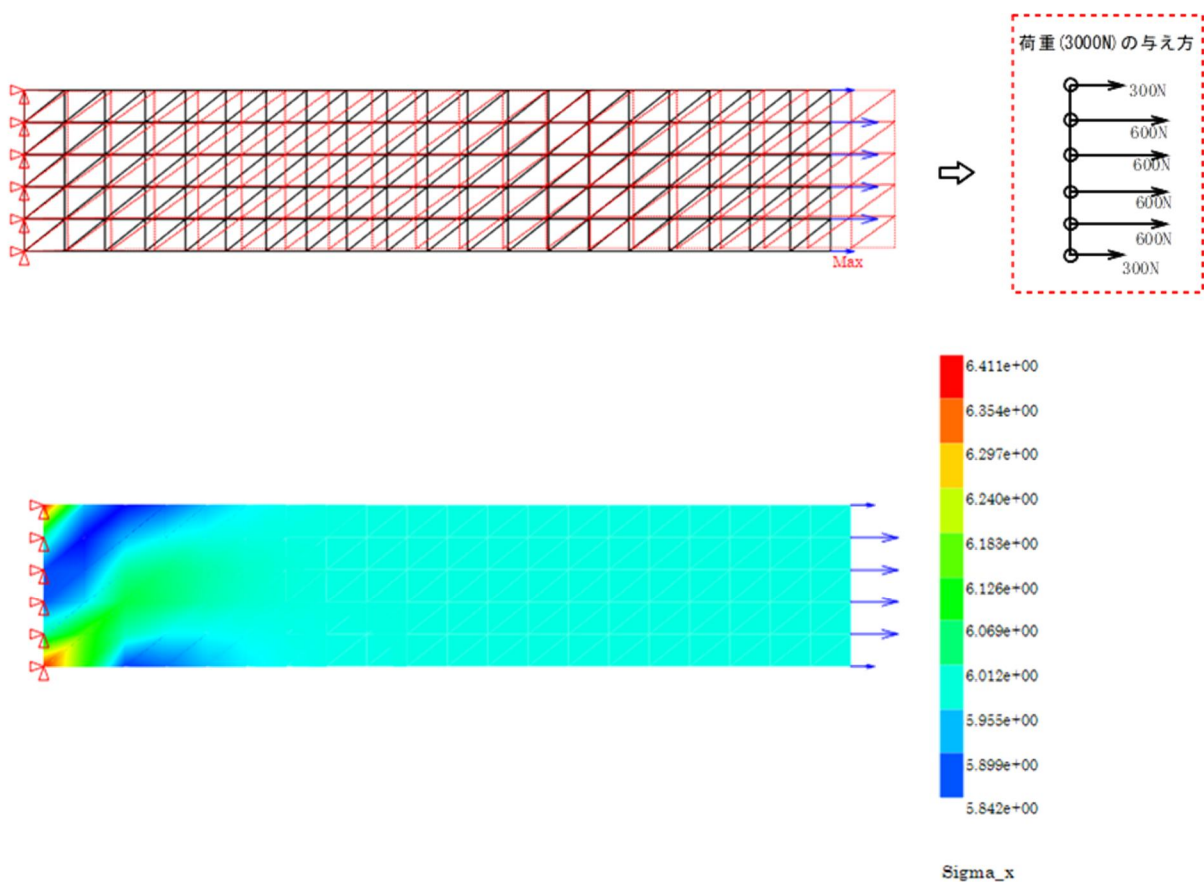


図 8 板の引張り

図 8 は，図 1 の形状の板の右端に，水平方向に荷重 3000N を負荷したときの解析例である．この問題では，図 8 の右上に注記したように，右端への負荷荷重の与え方には注意が必要である．右端に作用させる水平荷重については，分布荷重から由来していると考ええると，6 個の節点での荷重比は 1 : 2 : 2 : 2 : 1 となる．したがって，全荷重 3000 N を上節点に 300 N，中央の 4 個の節点に 600 N，下節点に 300 N と分配して作用させればよい．

この板は一様な引張り状態にあり，材料力学に基づく  $x$  方向の応力や伸びは

$$\sigma = \frac{P}{bh} = \frac{3000}{5 \times 100} = 6 \text{ N/mm}^2, \quad \lambda = \frac{Pl}{AE} = \frac{3000 \times 500}{5 \times 100 \times 206 \times 10^3} = 0.0146 \text{ mm} \quad (6)$$

と求められる．図 8 では， $\sigma_x$  がやや不自然な色づけになっているが，凡例を細かく見ると， $x$  方向応力はほぼ  $6 \text{ N/mm}^2$  の値の前後で分布していることに気づく．固定端でやや高い応力が生じているのは，ポアソン効果による  $y$  方向への収縮量を無理に抑えつけているためである．

また，FEM による右端の変位量は  $1.457 \times 10^{-2} \text{ mm}$  となっているので，正しい計算が行われていることがわかる．

## 【例 2】円孔を有する帯板の引張り (enkou.dat)

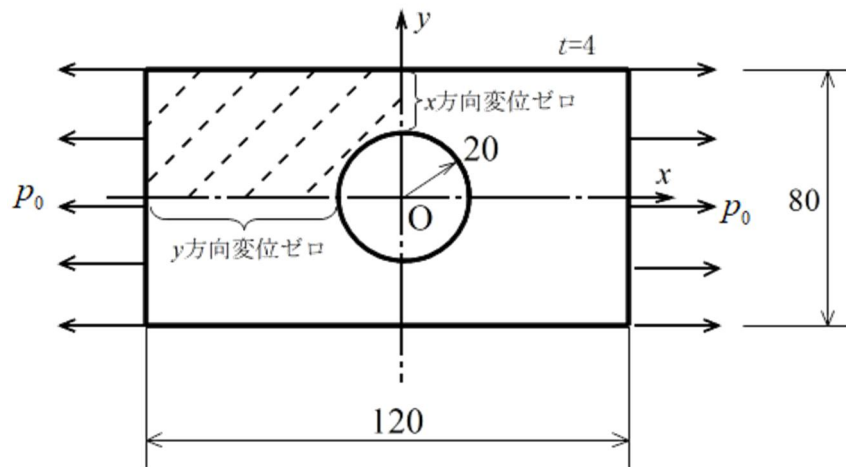


図 9 円孔を有する帯板の引張り

図 9 は，応力集中の典型的な問題として扱われる，円孔を有する帯板の引張り問題<sup>5)</sup>である．この問題は， $x, y$  軸まわりの対称性を有するので，図 9 の破線で示した  $1/4$  部分だけを取り出して解析すればよい．ただし，円孔中心を通る  $x$  軸上の節点は  $y$  方向変位がゼロ，また  $y$  軸上の節点は  $x$  方向変位がゼロという変位拘束があることを考慮する必要がある．

図 9 の寸法を与え，単位面積あたりの引張り力を  $p_0$ ，縦弾性係数を  $E=206 \times 10^3 \text{ N/mm}^2$  として図 10(a) のようなメッシュ分割を行って解析する．なお，帯板の左側縦辺には，上下端の節点に  $500 \text{ N}$ ，それ以外の節点に  $1000 \text{ N}$  の節点力を左方に作用させている．その結果，図 10(b) のような  $\sigma_x$  の応力コンター図が得られた．予想通り，円孔周辺に最大応力が生じていることがわかる．

図 10 の左側の縦辺に加えた応力の  $x$  成分  $(\sigma_x)_0$  (これは  $p_0$  と等しい) は，加えた節点力の総和 ( $1000 \text{ N}$  が 10 個， $500 \text{ N}$  が 2 個) を縦辺の面積 (縦  $40 \text{ mm}$  × 厚さ  $4 \text{ mm}$ ) で割ればよく

$$p_0 = \frac{1000 \times 13 + 500 \times 2}{40 \times 4} = \frac{14000 \text{ N}}{160 \text{ mm}^2} = 87.5 \text{ N/mm}^2$$

である．一方で，円孔周辺の  $x$  方向の最大応力は，解析結果から  $(\sigma_x)_{\max} = 381.9 \text{ N/mm}^2$  と得られる．したがって，この帯板の応力集中係数  $K$  は

$$K = \frac{\sigma_{\max}}{p_0} = \frac{381.9}{87.5} = 4.36 \quad (7)$$



と計算される。

一方、著者による弾性論に基づく解析より、帯板幅に対する円孔の大きさの比を変数とする円孔周辺の応力集中係数は図 11 のような結果を得ている。図 11 より、 $a=0.5$  のとき（図 9 では、帯板の幅 80 mm に対して、円孔の直径は 40 mm なので  $40/80=0.5$  と計算される量）の応力集中係数  $K$  は

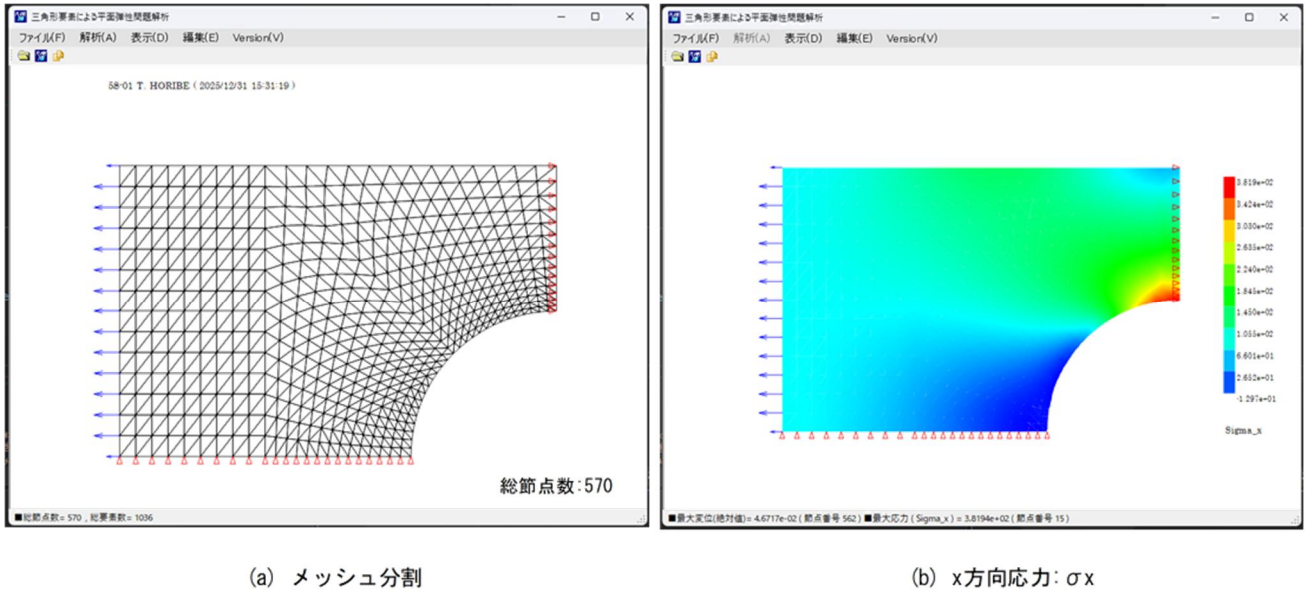


図 10 円孔を有する帯板の要素分割と  $\sigma_x$  のコンターマップ

$$K = \frac{\sigma_{\max}}{p_0} \approx 4.6 \quad (8)$$

であるから、FEM 解と理論解との差は 5%程度となっている。

堀辺ほか，偏心円孔を有する帯板の引張り，  
機論，Vol.72, No.723(2006)より

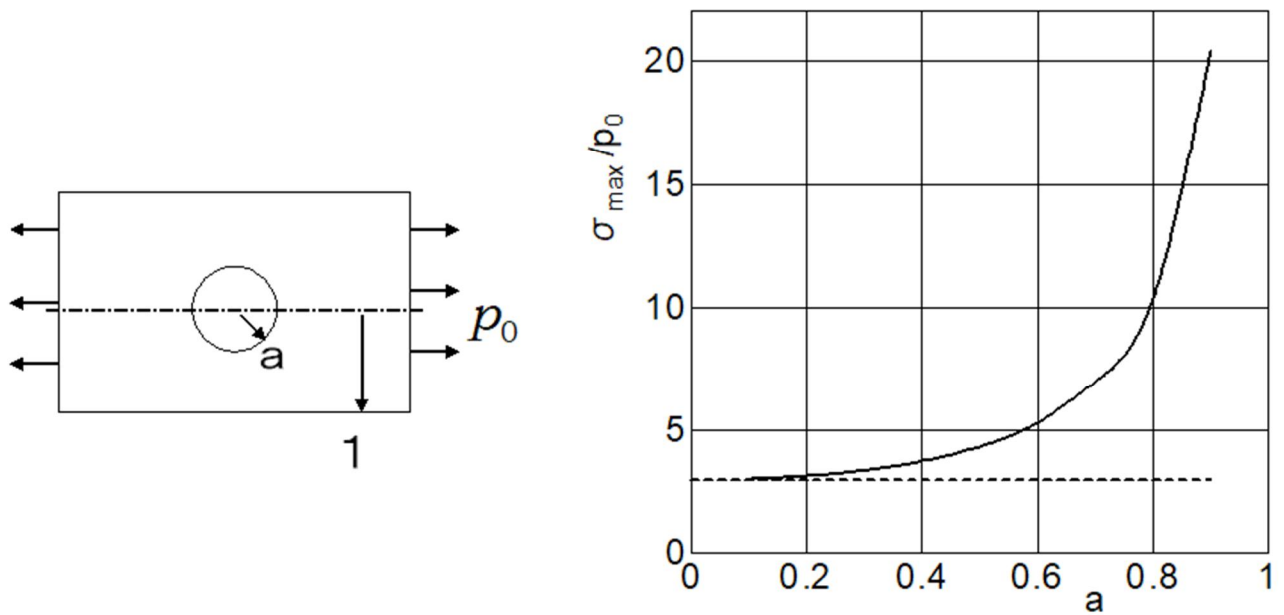


図 11 円孔を有する帯板の引張りの応力集中係数

【例 3】L 型はりの曲げ (LshapedBeam-rounded.dat)

図 12 は，L 字型の物体の右側下方の辺に，下向きの荷重を作用させた場合の要素分割図と Mises 応力のコンター図を示している．丸められた角部に応力集中が生じている様子を捉えている．

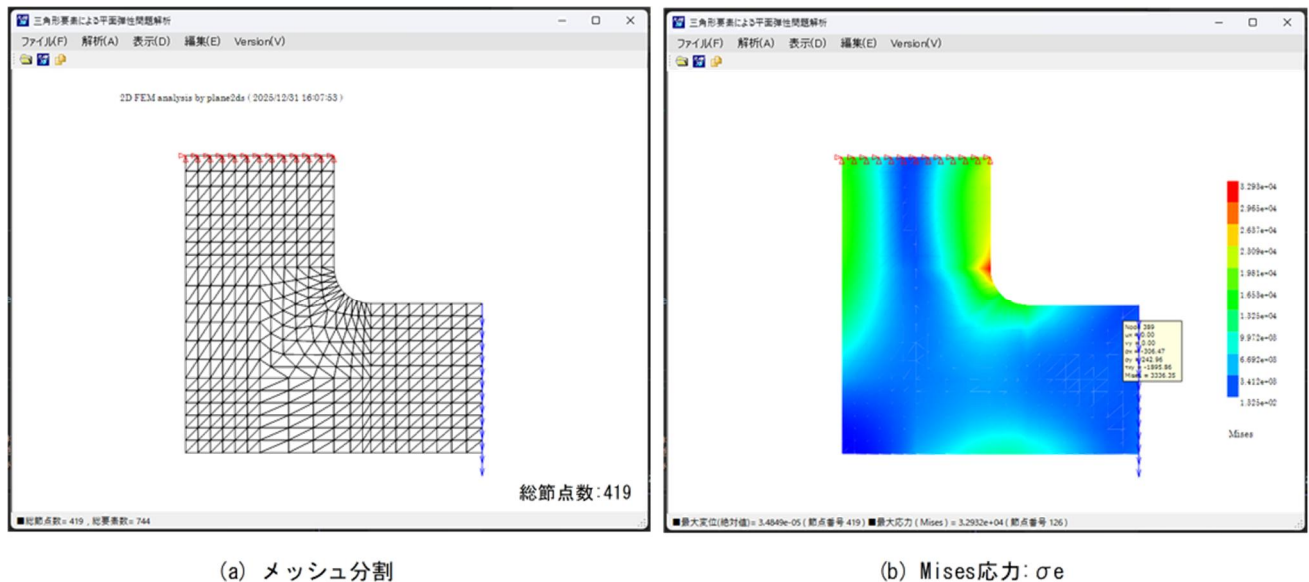


図 12 L 型はりの曲げ

## 8. 利用上の注意, 著作権ほか

本プログラムは, 基本的には, FEM の教育用に開発したものであり, 一般的な実務での利用は意図していないが, いくつかの解析例に示したように, 計算結果の正確性は担保している. したがって, 汎用 FEM ソフトと同程度の利用は可能のように思われる.

なお, 本プログラムは自由に利用できるが, 著作権は著者にあり無断複製や第三者への無断配布などは控えていただきたい.

本プログラムには, まだ, バグや操作法の不具合などが潜んでいることと予想される. その場合には, 著者へご連絡いただけるとありがたい (連絡先: [tadashihoribe\[at\]gmail.com](mailto:tadashihoribe[at]gmail.com), [at]を@に変えて下さい).

## 9. 参考文献

- 1) 戸川隼人著, マイコンによる有限要素解析 (続), 培風館 (1983).
- 2) 堀辺忠志著, Visual Basic でわかるやさしい有限要素法の基礎, 森北出版 (2008).
- 3) 戸川隼人著, 有限要素法概論, 培風館 (1981).
- 4) 堀辺忠志著, 例題で学ぶ材料力学, 森北出版 (2022).
- 5) 中原ほか 5 名, 弾性学ハンドブック, 朝倉書店 (2002).